

第一章では、Vendler(1967)の動詞分類とそれに対応する語彙概念構造、語彙概念構造と統語構造との結びつきを述べている。

第二章では、Tai(1984)による中国語の動詞分類をVendlerの動詞分類と対照整理し、中国語は英語と異なり、古代中国語の痕跡として残る少数の動詞以外に達成動詞(accomplishment verb)が存在しないと述べている。

第三章では、先行研究により中国語の複合動詞の分類を概観した後、複合動詞の定義にはChao(1968)を採用し、本論で扱う結果複合動詞を「動詞+動詞または形容詞である補語」の形式をもち、「原因事象+結果事象」を表すものと定義している。

第四章では、Li(1990)、Maruta & Dong(2004)、湯(1990)、石村(2000)による結果複合動詞の分析を検討し、それぞれの分析の不備を指摘し、併せて、結果複合動詞にみられる使役の意味について考察している。先行研究では、英語や日本語の達成動詞にみられる使役の意味について、それが行為連鎖から出てくると考えられている。例えば、McCawley(1971)の分析では、達成動詞は「主語の何らかの行為によって、目的語の状態変化ないし位置変化が引き起こされることを意味する。」とされている。つまり、「変化を引き起こす」意味を表すには動作主の行為が必要であることになる。これに対して、中国語の結果複合動詞の場合、全体として達成動詞であっても、変化を引き起こすものが行為でない場合も見られる。従って、中国語の結果複合動詞では、一つの事象が他の事象を引き起こすという形で結ばれていると考える。その際、「原因」と「結果」はそれぞれの事象に内在する性質ではなく、二つの事象が関わることによって初めて生じる関係であり、二つの事象が「原因」と「結果」という形で結ばれると必然的に使役の意味が生じるのであり、構成要素の個々の動詞から引き継ぐものではないと主張している。

第五章では、事象推移という観点から、現代中国語の複合動詞を分析している。結果複合動詞が事象と事象の組み合わせで生じるととらえると、従来の研究で、結果複合動詞と分析されていた「動詞+動相標誌(動詞が虚化し動作の到達、完成などを示すもの)」は、後項要素の動詞が事象を表さないため結果複合動詞ではないと明確に区別されることになる論じている。また、どのような事象の組み合わせが可能となるかを検討し、前項要素に状態動詞、後項要素に達成動詞が生じないことを観察した。また、出来上がった複合動詞の意味特性は達成動詞になり、本論での語彙概念構造の分析を用いれば、従来から存在するリンキング規則により、事象に参加する要素のどれが主語になり目的語になるかを予測できると論じている。

第六章では、英語の結果構文を、中国語の結果複合動詞を念頭に置きながら概説している。英語の結果構文は、主動詞と結果を表す結果述語からなる構文であり、「結果」が主動詞の語彙意味に含まれるかどうかにより二種類に分かれると論じている。一つは、主動詞が変化結果の意味を含む本来的結果構文であり、もう一つは、主動詞が変化結果の意味を含まない派生的結果構文である。そして、派生的結果構文においては、動作の意味を持つ動詞に結果述語を加えると、動作のみの意味から変化と結果までも含むというように意味が拡張される

と述べている。

第七章では、英語の派生的結果構文にみられる意味拡張と中国語の結果複合動詞に見られる意味拡張を比較し、英語の場合は行為連鎖による単調なものであるのに対し、中国語の場合は色々な事象が組み合わさって意味拡張を行い、現代中国語にほとんどみられない達成動詞を作る手段になっていると観察している。そして、中国語で色々な組み合わせが出来るにもかかわらず、第五章で見たように組み合わせが制限されている理由を論じている。すなわち、結果複合動詞の前項動詞に状態動詞が生じないのは、変化しないものが結果をもたらすことがないという理由により排除され、後項要素に達成動詞が生じないのは、もともと少ない達成動詞が同時に到達動詞(achievement verb)でもあり、達成動詞より複雑でない到達動詞の語彙概念構造で同じ意味を表すことが出来るため排除されると述べている。

「おわりに」では、本論文の分析で明らかになった点を箇条書きにしてまとめてある。

審査結果の要旨

本論文は、現代中国語の結果複合動詞を注意深く定義し、事象推移という新しい視点から分析したものである。

本論文の評価できる点は以下の通りである。

- (1) どの事象の組み合わせが可能であり、どの組み合わせが不可能であることを明らかにし、従来の研究で見逃されていた種類の動詞の組み合わせがあることを指摘した。同時に、不可能な事象の組み合わせの原因について論じた。
- (2) 作り出された複合動詞が達成動詞になることを指摘し、現代中国語の達成動詞の供給源になっていることを明らかにした。
- (3) 本論文の語彙概念構造の分析を用いて、すでに他のところで有効性が認められているリンキング規則により事象に参加する要素が統語構造上のどの位置に生じるのかを予測できるようにした。
- (4) 英語の結果構文と比較しながら、中国語の結果複合語の特徴を浮かび上がらせた。

今後の課題としては、同じような「動詞+動詞」の結果複合動詞をもつ日本語との比較を通して、結果複合動詞の普遍性と日本語及び中国語の個別性を明らかにすることが望まれる。

本審査委員会はこれらの評価にもとづいて、本論文が博士号の請求論文として十分な内容を有すると認定した。さらに、本論文は言語学の専門性の強いものであることから、授与する学位は博士(文学)が妥当であるという結論に達した。